

畳空間にかかわる住様式と住意識の検討—福岡の注文戸建住宅における— (第2報 居住者意識からみた畳空間の動向)

奈良女大 ○伊東理恵 今井範子

【目的】第2報では、注文戸建居住者の畳や畳室に対する意識を探り、畳離れの動向を明らかにすること、畳空間に何を求めているかを明らかにすることにより、今後の畳空間の方向性を精神面から探ることを目的としている。

【方法】調査対象は、第1報での対象世帯における18歳以上の居住者とした。有効サンプル数369。対象概要は男性4割、女性6割。年齢は40代を中心に各年代に分布。平均43歳。

【結果】畳に愛着のある人は6割を超えるが、60歳以上では8.5割であるのに対し30歳未満では半数程度である。畳室希望数は「少なくとも1室」52%、「2室以上」38%である。その室種は1室の場合は客間5割、居間2割である。2室希望の場合、1室は客間を希望する者が約4割で客間と居間、客間と寝室の組み合わせが多い。畳への愛着意識も必要性も若年層ほど低く、特に30歳未満では「畳離れ」の進行が明らかであり、関西と同じ傾向がみられる。ごろ寝の床材として畳を好む者は半数を超えるが、若年層ほど床材にこだわらない傾向がみられる。畳の良さとして、「自由な姿勢」「い草の感触」「新畳の香り」、畳室の良さとして「心が安らぐ」「大勢が座れる」が多くあげられた。「い草の感触」「新畳の香り」「心が安らぐ」など、精神性にかかわる項目については畳に対する愛着の有無により顕著な差がみられた。今後の畳空間の動向について、「1室残る」約半数、「畳室のある住宅とない住宅に分かれる」2.5割、「一部の住宅に残る」1.5割、「次第になくなる」はごくわずかである。畳空間の計画において、デザインや素材については伝統的なものを好む人が多いが、新しいデザインや素材の採用などの新しい試みも望まれている。